文部科学省 地(知)の拠点 平成25年度採択 文部科学省「地(知)の拠点整備事業」

To-Collabo通信

Tokai university Community linking laboratory

Vol.12
2016.10.28

To-Collabo シンポジウム「ユニバーシティとユナイテッドシティ」包括的な地域連携のあり方を議論

10月19日に湘南校舎で、To-Collaboシンポジウム「ユニバーシティとユナイテッドシティー湘南地域における東海大学と複数自治体との連携の可能性」を開催しました。文部科学省の平成25年度「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」の採択期間5年の最終年度となる次年度以降を見据え、連携自治体との関係をさらに強化し、地域課題の掘り起こしと解決に向けた教育研究へと発展させることが目的です。湘南校舎周辺地域の行政関係者や市民の皆さま、本学の教職員ら約50名が出席しました。

山田清志学長のあいさつやTo-Collabo推進室の池村明生室長によるプログラムの概要説明に続いて、政策シンクタンクPHP総研研究推進部長・主席研究員の荒田英知氏による基調講演を実施。「大学を拠点とした広域自治体連携」をテーマに、COC事業や政府が進める「地方創生」の取り組みを紹介し、「大学が自治体間の触媒となり、間の壁を取り外せば好循環を生み、課題解決力の高度化につながるのではないか」と語りました。

後半でのパネルディスカッションでは、池村室長が提言として、「大学の教育研究を充実させるとともに地域の課題解決を進め、発展を図るためには複数自治体との連携強化のための組織作りが重要。『湘南丹沢東海大学地域連携合同委員会』というような組織を発足させ、各自治体の課題を集約し、大学の地域連携活動と適切なマッチングをコントロールし、コーディネートする必要がある」と語りました。

続いて、池村室長の提言を受けて、荒田氏と観光学部の屋代雅充教授、医学部の石井直明教授、秦野市政策部長の諸星勝氏、伊勢原市企画部長の山口清治氏によって、それぞれの立場から、社会情勢を踏まえた意見交換がなされました。

「秦野市では東海大生による小中学校での学習支援や観光振興などさまざまな協力関係が築かれてきました。今後は一方通行ではなく、双方がともにつくり上げる連携を目指していきたい」と諸星氏。山口氏は、「To-Collaboプログラムの活動が周辺自治体に広がることで、地方創生や地域活性化にさらなる効果が出るのではないか」と期待を語りました。屋代教授は、「丹沢湘南観光連携会議の取り組みを通して実感しているように、自治体の間に大学が入ることで、議論が活性化される効果もある。より有意義な活動を目指すべき」と提案。石井教授は、「大学側にはマンパワーや予算面などの課題もある。大学と周囲の協力体制を構築し、ランニングコストを確保していく仕組み作りも大切」と指摘しました。荒田氏からは、「東海大学はCOC事業に採択された大学の中でも、独自の展開を考えられている。今後も活動テーマを吟味し、効果的な方策で成果につなげてもらいたい」と期待を寄せられました。

最後に梶井龍太郎副学長があいさつに立ち、「採択期間終了をもって地域連携の取り組みを終えることがないよう、来年度には学内に地域連携センターを開設する計画。包括連携に向けた組織の立ち上げも通じて、地域の繁栄につなげていきたい」と抱負を述べました。

荒田氏による基調講演

屋代教授による事例報告

石井教授による事例報告

パネルディスカッション登壇者

本学の取り組みについてコメントする荒田氏

東海大学と複数自治体との連携強化をめざす組織づくりの提案

インタビュー

東海大学と地域を結ぶ8つの大学推進プロジェクト

前号の地域デザイン計画の2事業に続いて、今回はライフステージ・プロデュース計画の「大学開放事業」「スポーツ健康事業」の代表を務める教員に、これまでの活動と今後の展開について聞きました。

池村 明生 教授
教養学部芸術学科デザイン学課程

03 大学開放事業
―大学の特色を生かし、新しい拠点づくり―

音楽、美術、デザインと芸術学科の特色を生かし
毎年開かれているおひろめ芸術祭

本事業では、各校舎の特色やこれまでに実施してきたイベントを生かした"地域連携デー"を開催し、地域住民と教職員、学生が多世代交流を図ることを目的としています。そのフラッグシップとなる取り組みが、湘南校舎で12月3日に開催する「TOKAIグローカルフェスタ2016」です。

教養学部芸術学科による「おひろめ芸術祭」をはじめ、本学の留学生が日本人学生とともに自国の魅力を紹介する「国際フェア」、子どもたちに科学の楽しさを伝える「世界一行きたい科学広場」など、さまざまなイベントを同時開催します。

東海大学学生会キャンパス創造委員会が「東海散歩」と題して各企画をまわるスタンプラリーを行うほか、平塚市・秦野市・伊勢原市・大磯町が協力して地域の魅力を紹介する「湘南マルシェ」なども企画しています。

大学の特色を生かし、地域と連携することで新しい地(知)の拠点をつくっていく考えです。

8月の「世界一行きたい科学広場 in 湘南 2016summer」には
たくさんの親子連れが来場した

国際フェアでは留学生と日本人学生が
民族衣装を着用して国の魅力を紹介

04 スポーツ健康事業
―健康意識を啓発し 健康増進を図る―

伊勢原市と連携し、市民の健康増進・健康意識啓発を図るための事業を展開しています。

2009年度から開講している「東海大学健康クラブ・市民健康スポーツ大学」は、健康に関する講義やトレーニングなど、年間72回にわたる講座を開講し、約80名が受講しています。6月と翌年2月には、健康度や体力の測定、メンタルヘルスや栄養調査を実施。運動の成果を受講者に還元するとともに、集積したデータを分析し、スポーツが心身の健康に及ぼす効果について、科学的な検証を行っています。

「市民健康スポーツ大学」では、
学生らが体力測定や検診をサポート

検診機器を積んだバスで伊勢原市内の7カ所を巡回する「健康バス測定会」は、上半期に3カ所で開催し、約100名が受診。検診から遠ざかっていた参加者から、「今後は定期的に受けたい」といった感想が聞かれるなど、健康に関心が低い市民への啓発活動として、着実に成果を上げつつあります。この事業でも検診データを集積し、分析を進めています。

また、学生が地域の高齢者と人生問題などについて語り合う「世代間交流事業」は、健康科学部の「地域保健福祉活動論」の授業として7月に開催。11月3日の伊勢原祭では市民のための健康実践講座などを行うほか、13日には学生と高齢市民による野外活動も実施する計画です。

いずれの取り組みも、体育学部や医学部、健康科学部の学生らが運営をサポート。地域と大学が交流し、互いに学び合う場になっています。

「健康バス」のステッカーを貼ったバス
で市内を巡回

世代間交流事業は「人生の大先輩の話を聞く貴重な機会」と学生にも好評

沓澤 智子 教授
健康科学部看護学科

活動報告

― 伊勢原校舎 ―
科学実験教室と研究室ツアーを開催

8月5、6日に医学部の教員らが、伊勢原市立子ども科学館と連携し、地域の小学生らを対象とした科学実験教室と研究室ツアーを開催しました。幼少期から医学研究への理解と関心を深めてもらおうと、本プログラムの地域志向教育研究経費採択課題「生命科学実習を通じた地域連携による幼児教育と初等教育の橋渡しの試み」(代表：阿部幸一郎准教授 医学部医学科基礎医学系)の一環として開いたもの。小学生11名のほか保護者8名と園児が参加しました。

5日は同科学館でDNAを抽出する実験などを実施。6日には伊勢原校舎の医学部基礎医学系の7研究室と生命科学統合支援センターを見学し、学生や教員らが研究内容や実験装置について説明しました。参加者からは、継続を望む声が数多く寄せられました。

学生の説明を真剣に聞く子どもたち

― 熊本校舎 ―
農学部・長野教授のたねコレクションを紹介

熊本市の島田美術館で9月9日から19日まで、「長野克也コレクション『世界のたね展』」を開催しました。本プログラムの大学推進プロジェクト「観光イノベーション計画 文化・芸術事業」の一環で、農学部応用植物科学科の長野克也教授が収集した種子のデザインの魅力や、個性の違いを伝えようと経営学部観光ビジネス学科の阿部正喜教授が主体となり開催したものです。

期間中は、熊本校舎で学ぶ学生たちも運営に参加。11日、17日、18日には、長野教授による「はなしのネタはタネ」と題したトークショーも実施しました。11日間で約920名が来場し、長野教授は、「展示にはあまり情報を多く表示せず、スタッフに聞いてもらう機会を増やしました。学生にとっても貴重な経験になったと思います」と話していました。

展示された様々なたねは来場者を魅了

― 札幌校舎 ―
英語とものづくりで「夏のふれあい体験」

札幌校舎で7月30日、「東海大学夏のふれあい体験」を開催しました。同校舎の国際文化学部国際コミュニケーション学科による「Active English 英語で遊ぼう!」と同学部デザイン文化学科による「～回して面白い～パラパラまんが装置を作ろう!」の2イベントを同時開催したもの。本プログラム地域志向教育研究経費採択課題「札幌市南区の再発見と活性化：世代を越えた活動と大学の地の貢献」(代表：竹中践教授 生物学部生物学科教授)の一環として実施。英語を使った活動やゲーム、簡単にできる工作といった体験と学びを通じて、家族で地域の魅力を再発見してもらうことを目的としました。

小学生とその保護者ら50名あまりが、それぞれの企画に分かれて、各学科の教員が用意したプログラムに挑戦しました。

思い思いのパラパラ漫画装置が完成

注目の取組

2016年度To-Coーーaboプログラム地域志向教育研究経費採択課題、大学推進プロジェクトの中から、注目の取り組みをピックアップ!!

地域デザイン | 安心安全

第2回防災フォーラムを実施 秦野市の防災体制などを考える

代表：内田 理(情報理工学部情報科学科 教授)

湘南校舎で10月1日に、地域住民らを対象にした第2回防災フォーラム「地震発生!あなたならどうする?」を開催しました。本プログラムの大学推進プロジェクト「地域デザイン計画 安心安全事業」の一環として、秦野市や秦野市大根地区自治会連合会と連携して実施したもの。6月に開催された「市民による防災意見交換会」と連動し、市民の防災に対する意識向上をはかることが主な目的です。

会場の2号館小ホールに約220名が集った当日は、防災システム研究所所長である防災・危機管理アドバイザーの山村武彦氏による基調講演や、工学部土木工学科の梶田佳孝教授、情報理工学部情報科学科の内田理教授による活動紹介、「市民による防災意見交換会」を実施しました。

ライフステージ・プロデュース | 大学開放

小学生の防災宿泊体験 大学に泊って意識高める

代表：遠藤 晃弘(観光学部観光学科 講師)

代々木校舎で10月8、9日に、小学生を対象とした防災宿泊体験「大学に泊まろう!」を実施しました。近隣に住む小学生が学生らと交流し、日常とは違う状況で助け合い、防災意識を高めることが目的です。本プログラムの地域志向教育研究経費に採択された「スマイルよよぎプロジェクト」の一環で、チャレンジセンター・ユニークプロジェクト「よよさんぽ」と学生会のメンバーが運営。教職員ら35名と、近隣の小学校に通う児童ら8名が参加しました。

当日は、講堂にテントを張り、地域住民の協力を得て女子学生が作ったけんちん汁と非常食を夕食として取ったあと、防災用簡易ライトで校内を探検しました。翌朝の閉講式では、学生が参加者一人ひとりに修了証を手渡しました。

観光イノベーション | 地域観光

清水港 未来を創るアートプロジェクト

代表：松本 亮三(観光学部観光学科 教授)

海洋学部の東惠子教授のゼミナールに所属する学生6名が、「清水港 未来を創るアートプロジェクト」に取り組んでいます。同プロジェクトは、市民・企業が主体となって美しい港町づくりを進める「清水港・みなと色彩計画」の25周年事業の一つ。清水港「日の出岸壁」の改良工事で設置されている擁護ボードを、乗船客や一般市民からの清水港に対するメッセージで彩っています。

学生たちは、本プログラム大学推進プロジェクト「観光イノベーション計画 地域観光事業」の一環で参加。7月18日に清水港を訪れたダイアモンド・プリンセス号の乗客からメッセージカードの収集を開始。豪華客船が来航するたびに活動し、現在は約700通を擁護ボードに掲示しています。

活動報告

― 湘南校舎 ―
平塚市長と学生が「ほっとミーティング」

湘南校舎で10月5日に、平塚市が主催する対話集会「市長と語ろう！ほっとミーティング」が開催されました。落合克宏市長が市民からの要望や意見を聞き、市政に反映しようと2011年度から実施しているものです。

今回は、「若い市民の意見を聞きたい」という落合市長の要望を受け、To-Collabo推進室が協力。これまでに同市のPR事業や地域住民との交流イベントに取り組んできた学生9名が参加し、落合市長と活発な議論を交わしました。

学生たちは今後、話し合った内容をもとに平塚市のシティープロモーション案製作に挑戦します。1月中旬に市庁舎で落合市長や関係職員を前にプレゼンテーションする予定です。

落合市長を囲む参加学生たち

― 清水校舎 ―
英語ボランティア通訳の研修会を開催

静岡市役所清水庁舎で9月12日に、清水校舎の教員が「外国客船寄港時の英語ボランティア通訳研修会」を開催しました。本プログラムの地域志向教育研究経費採択課題「外国客船入港における国際観光事業への振興支援と英語教育」の一環で、市内での通訳ボランティアと行政、大学の意見交換を目的に初めて実施したものです。

当日は約70名の市民が参加。清水教養教育センターの加藤和美講師とゴフ・ウェンディー・マリー講師による講演の後、参加者を10グループに分け、お互いの経験談を話し合いました。加藤講師は、「意見交換の中で集まった課題をもとに、通訳ボランティアの疑問に答えられるようなマニュアルブックを作成していきたい」と抱負を語っています。

グループの意見交換に耳を傾ける加藤講師

― 清水校舎 ―
望星丸で駿河湾を探る洋上セミナー

清水校舎の海洋学部が、9月25日に学園の海洋調査研修船「望星丸」を用いた洋上セミナー「駿河湾ワクワク洋上散歩」を開催しました。本プログラムの地域志向教育研究経費採択課題「洋上キャンパス―望星丸洋上セミナー」の一環で、静岡県在住、在勤、在学の一般市民を対象に駿河湾の魅力を知ってもらおうと2013年度から毎年実施しているものです。

当日は58名が参加し、海洋学部の教職員や学生スタッフの案内のもと、清水港鉄道岸壁から望星丸に乗船。駿河湾上で船内見学ツアーや深海生物用の特殊なネットで採集したプランクトンを観察しました。参加者は、「コンパスやレーダーなどの機械を見ることができ、日ごろできない経験を積めました」と笑顔で話していました。

採集されたプランクトンを覗き込む参加者

地域の声

トコラボプログラムにご協力いただいている自治体の関係者からこれからの期待について伺いました。今回は伊勢原市です。

伊勢原市企画部 部長
山口清治さん

東海大学伊勢原校舎には健康科学部や医学部、付属病院が置かれ、市民の日常生活にも密接にかかわっています。さらに近年は、To-Collaboプログラムを通じて「スポーツ健康分野」はもとより、大山を中心とした「観光分野」でも連携が進んでいます。これらは市政の課題とも非常にマッチしており、今後のさらなる活動の活性化に期待しています。

特に健康スポーツ分野は、市民の健康づくりの観点から非常に重要な取り組みです。本市でも高齢化は着実に進んでいますが、長寿命化に伴い「健康に暮らしていける時間をいかに延ばせるか」といった視点も大きな問題といえます。その中で、To-Collaboプログラムで行われている「市民健康スポーツ大学」や「健康バス」の巡回は課題解決のみならず、高齢者となる以前の40～50代の市民に向けた健康に対する意識付けの手段としても有効であると考えています。今現在は健康問題に特別な関心がなくても、いつかは不安を抱えるときがくるかもしれません。早い段階から備えることで、健康でいられる時間は伸ばせます。東海大との連携で、気軽に健康を考えてもらえる環境を整えていきたいですね。

また、伊勢原市では新東名高速道路の開通に伴う新たな土地利用や若い世代の子育て支援にも力を入れています。今後はこれらの分野においても、総合大学である東海大との協力を深め、双方にとってメリットのある関係性を強めていきたいと願っています。

在日外国人向けモニターバスツアーについて報告する屋代教授（10/19 シンポジウム）

伊勢原市北コミュニティセンターでの「健康バス測定会」の様子

文部科学省　平成 25 年度「地（知）の拠点整備事業」採択
「To-Collabo プログラムによる全国連動型地域連携の提案」

全国にキャンパスを有する大学ならではの「全国連動型地域連携活動」を柱に、地域特有の問題や共通課題を各校舎の学部、学生、研究者が共有し協力して解決策を見いだす取り組みです。To-Collabo（トコラボ）とは Tokai University Community Linking Laboratory の略称で、日本全国に広がる総合教育機関の高等教育拠点である東海大学（Tokai University）の特色を生かした教育・研究活動と地域をつなぐ（Community Linking Laboratory）ことを示しています。

トコラボ WEB サイト　トコラボ Facebook

活動情報配信中 !!

『To-Collabo通信』Vol.12（2016年10月号）
発行　東海大学 To-Collabo推進室
〒259-1292 神奈川県平塚市北金目４丁目１番１号
TEL　0463-50-2406（直通）
FAX　0463-50-2034
E-mail　coc@tsc.u-tokai.ac.jp
WEB　https://coc.u-tokai.ac.jp/
Facebook　https://www.facebook.com/tokai.coc

東海大学